

# 在日コリアンにおける文化運動としての ワンコリアフェスティバルの意義<sup>1</sup>

孫 ミギョン\*

Mikyong SON

Significance of One Korea Festival for ZAINICHI Korean (Korean in Japan) as a cultural movement

## 1 はじめに

日本には30万以上もの「祭り」があると言われている。祭りには、人の成長や人生の節目に行う通過儀礼、一年のサイクルに合わせて行われる年中行事、集団や組織、または地域社会によって行われる各種儀礼や行事など様々なものがある。祭りは、人間の遊戯的な本性が「文化的な形で表現」されたものであり、個人と個人、個人と集団、集団と集団の関係性の文化など、日本の集団主義文化や伝統的な生活の様式が顕著に現れている。このような祭りは、マイノリティの社会においてどのような意義を持つのだろうか。グローバル時代といわれる現代、マイノリティ社会における祭りは、しばしばマジョリティとは違った意味合いを持つ。マイノリティは、自らの民族的アイデンティティの可視化を図るため、「表現方法」として祭りをを用いたり、集団あるいはコミュニティのなかで、自らのアイデンティティを確認する一連のプロセスとしての機能や役割を果たすために用いたりしているのである。

在日コリアン<sup>2</sup>社会において、祭りは「アイデンティティの表現」や「民族文化を継承の場」として用いられることが多かった。在日コリアン社会は、100年以上の歴史を持つ、日本で最も古いマイノリティ集団でもある。そのため、在日コリアン二世や三世になると、外見や言語からは日本人と区別がつかない。外見や言語では区別がつかないからこそ、敢えて自身の民族的アイデンティティを明らかにしているのかも知れない。祭りは、在日コリアンの民族的アイデンティティの表現の場、あるいは、日本社会や祖国に対する社会運動の一つの形として取り入れられた。

1983年の生野民族文化祭を皮切りに、文化表現を社会運動に取り入れた祭りは、1985年のワンコリア

フェスティバル、1992年の京都九条マダンなど、徐々に全国各地に広がった。これまで日本社会で見えない「私的領域」で行われてきた在日コリアンの文化が、このように社会運動の一環として文化表現を取り入れ、「祭り」という形態を用いることで「公的領域」となり、可視化されたのである。

本稿では、在日コリアンと関わる多くの祭りのなかで、「ワンコリアフェスティバル」を事例に取り上げる。これを通して、この祭りの持つ意味合いを明らかにしていきたいと考える。まず、日本と韓国それぞれのワンコリアフェスティバルに関する先行研究について触れておく。日・韓におけるワンコリアフェスティバルの先行研究は、いずれも在日コリアンがもつ特殊性に着目して進められており、ワンコリアフェスティバルについても両国においてそれぞれ違う形で研究されてきたが、日本よりも韓国の方が研究論文が多い。韓国のワンコリアフェスティバル研究は、大きく二つの系統に分けることができる。

一つ目は、在日コリアンの「統一運動」にフォーカスを合わせた研究である。ワンコリアフェスティバルは、在日コリアンの統一運動の一つとして取り上げられている。例えば、Chung(2007)は、在日コリアンの統一運動の時期別変化や特徴について、影響を与えた要因を「在日コリアン変数」、「南・北関係による変数」、「日本社会の変数」の三つにわけた。在日コリアンの統一運動が南・北の政治状況と連動し、南北の理念対立の縮小版になっていること、日本社会の変数の影響力は大きくはなかったものの、日本市民社会が成熟するにつれ、在日コリアンの統一運動が、日本の市民運動と連帯をしていく土台になったと指摘している (Chung, 2007: 261)。その他にも、Ji(2013;a)、Ji(2013;b)、Youn・Cho(2014)、Ji(2015)、Lee(2015)、Kim・Yim(2016)などが、このような統一運動というアプローチから分析してい

\* 大阪市立大学都市研究プラザ 特別研究員

る。

二つ目の、黄(2010)、孫(2011)、Ji(2013b)、金(2013)などの研究は、社会・文化的な側面にフォーカスを合わせて、フェスティバルと統一運動、フェスティバルと民族のアイデンティティと関連して分析している。例えば、孫(2011)は、ワンコリアフェスティバルが極めて政治的な 이슈を「フェスティバル」という文化的な形に昇華させたものであり、南や北いずれかに偏った政治運動は共感を呼びにくいことを踏まえ、日常生活のなかで在日を感じる問題などを世論化させながら、イデオロギーの壁を乗り越える試みであると分析した。

一方、日本のワンコリアフェスティバルの研究は、日本社会におけるマイノリティ集団の民族文化として取り上げられている。代表的な研究として飯田剛史の『在日コリアンの宗教と祭り』(2002)、「在日コリアンと大阪文化」(2006)などがある。飯田は、在日コリアンの祭りが生み出された社会的条件について検討し、そこからホスト社会との文化的同質化の傾向と、同時にそれに対抗する民族文化運動が生まれ、祭りに発展していく過程を考察した(飯田、2002:319)。

これまでの日・韓においての在日コリアン研究は、日韓関係・国際社会の変化や朝鮮半島情勢、日本国内における在日コリアンの社会的・法的地位、社会的 이슈などの影響を受けながら進められてきた。特に、1980年代以前研究では、移住の歴史や差別・人権問題、アイデンティティなどの政治・社会的なものがほとんどだったが、1980年代以降は在日コリアンの生活文化に関する研究も増えている(孫、2016:131)。在日コリアンの生活文化に着目した研究分野の拡大は、在日コリアンの実態を詳細に分析し、精巧化・明確化する過程にあるといえるだろう。このような研究の流れのなかで、民族文化やワンコリアフェスティバルを含んだ研究は、歴史的・政治的な存在であった在日コリアンが、どのように朝鮮半島の文化と関わってきたのかを明らかにする作業でもある(高・孫、2014:12)。

本稿の目的は、ワンコリアフェスティバルが在日コリアン社会や日本社会にどのような影響を及ぼしたのか、さらには海外のコリアン社会や祖国である韓国社会にどのような影響を与えたのかについて、明らかにすることである。そのために、まずワンコリアフェスティバルを四つの時期に区分し、それぞれの特徴を考察する。そして、筆者が2010年に行ったアンケート調査結果<sup>3</sup>を基に分析し、議論を進めていく。この、ワンコリアフェスティバルが日本人

や在日コリアンに一体どのような影響を与え、どのような効果をもたらしたのかを明らかにしたい。

## II ワンコリアフェスティバルの概要

### 1. ワンコリアフェスティバルの誕生の背景

1945年8月15日、日本の敗戦により朝鮮は解放を迎えたが、1948年2月に国連小総会で「可能な地域における選挙」実施が可決された。その結果、同年5月10日、南側だけでの単独選挙が実施され、李承晩<sup>イ・スンマン</sup>政権が誕生した。これに対抗するように、北側では9月9日<sup>キム・イルソン</sup>に金日成を首相とする朝鮮民主主義人民共和国が樹立され、朝鮮半島に二つの国家が存在するようになった。一方、日本国内では、日本に残った在日朝鮮人の支持をうけ、1945年10月15日に在日朝鮮人連盟(以下、朝連)が結成された。しかし、朝連の指導部に不満を抱き「反共産主義」の立場を表明した人々によって、翌年10月には在日朝鮮居留民団(以下、民団)が結成された。このように立場を異にする二つの組織の誕生で、在日朝鮮人社会も北を支持する者と南を支持する者の二つに分かれ、まるで朝鮮半島と同じく分断されてしまった(孫、2015:69)。

1950年に朝鮮戦争が勃発すると、朝連は韓国に対する戦争遂行のための武器輸送を阻止する運動を行った。一方で、民団は義勇軍を募集するなど、韓国を積極的に支援した。朝鮮戦争は、在日コリアン社会において、韓国を支持する民団と北朝鮮を支持する朝連との分裂を加速化させた。1949年朝連の解散、民団の結成、李承晩政権の民団の認定、朝鮮戦争における参戦と支援をめぐる左右の理念対立と分裂、1955年には在日本朝鮮人総連合会(以下、総連)の結成、1965年日・韓協定の締結を経た結果、在日コリアン社会の分裂は膠着化された(JI、2013a:126)。在日コリアン社会の分裂は、内的・外的要因が複雑に絡んだ結果であった。朝鮮半島が38度線により南北に分断されたことで、在日コリアンは祖国の分断と民族差別という二重の困難に晒された。在日コリアン社会の内部は、民団と総連の反目、世代間の葛藤、帰国か、定住か、統一が優先か、反差別が優先かなどの葛藤の続くなかで、自分たちも分裂に分裂を重ねていた。

解放から1960年代末までの在日コリアンの民族運動は、一世が主導する祖国指向の運動が中心だったが、1970年代に入り、一世から二世へ世代交代が進

むなかで、祖国統一に対する関心が薄れていた。さらに二世、三世へと世代が移るにつれ、意識は祖国指向から日本社会に定着する指向へと変化していった。それは言い換えれば、政治志向性から非政治志向性へ変わっていったことを意味し、そのため統一運動への関心も薄れていった (Chung, 2007: 222)。そして、1980年代に入ると、理念的な問題意識によって、在日コリアンの日常生活における差別撤廃運動などが行われるようになった。冷戦体制が崩壊された1990年代以降は、日本の市民運動と連帯し、多文化共生社会を目指す運動へと進んでいる (JI, 2013a: 133)。

このような状況のなかで進められてきた在日の統一運動は、理念や体制の異なる北朝鮮 (朝鮮民主主義人民共和国) と韓国が、それぞれ異なる統一の形を目指していたため、強い政治志向を示すしかなかった。他方、1980年代半ばから在日朝鮮人の内部では、南北分断を克服しようとする動きがはじまり、二つに分かれていた在日社会の亀裂を埋めようとする動きが行われるようになった。「ワンコリアフェスティバル」は、まさにこのような流れから生まれたのである。

## 2. ワンコリアフェスティバルの経過と時期別特徴

ワンコリアフェスティバルは、在日コリアンの立ち場から、統一運動・反差別運動などのより広範な民族運動と市民運動をつなげる新たな統一運動として、1985年8月15日「光復40周年」の記念にスタートした。しかし、この統一運動は、直接的で政治的な表現方法ではなく、婉曲的に幅広く、誰もが参加しやすい文化運動という形態を用いて始められた (鄭, 2015: 86)。つまり、ワンコリアフェスティバルは、それまでの統一運動の「理念」を超越し、「文化」媒介に新しいメッセージを発信することを目指したのである。それこそが、ワンコリアフェスティバル運動の原動力であり、原点であった。このワンコリアとは「一つの朝鮮」、つまり「分断された朝鮮半島の統一」を意味し、「統一への想い」を込めたものである。分断の克服、北だの南だのという政治的なイデオロギーを主張せず、若者の興味を引き付けるユニークな文化運動の形として、「祭り」という形式を取ったのである。しかし、なぜ「祭り」だったのか？ これについてワンコリアフェスティバル実行委員長の鄭申寿は、「在日コリアンは、どんなに対立していても冠婚葬祭には集まる。とくに祭祠 (祖先祭祀) は、年に何度か決まった日に親戚が集まる。親戚が集まる冠婚葬祭の延長として祭りの形にした」 (鄭,

2015: 86) と述べている。

ここで、ワンコリアフェスティバルの略史や時期別の特徴を述べるあたり、四つの時期に分けた。最初の草創期 (1985年～1989年)、跳躍期 (1990年～1999年)、発展・拡散期 (2000年～2010年)、第二の跳躍期 (2011年～)<sup>4</sup>である。

### 1) 草創期 (1985年～1989年) : 新たな統一運動の模索や理念を乗り越えた統一メッセージの発信

1980年代は、まだ東・西冷戦体制のもとに朝鮮半島を取り巻く状況も緊張感が漂う時期であった。当然ながら、朝鮮半島の状況もそのまま反映され、在日社会も民団や総連に分かれて対立は激化していた。このような状況のなかでスタートしたワンコリアフェスティバルは、新たな統一運動を模索しながら、それまでの理念を乗り越えて統一メッセージを発信したという点で意義があるといえる。

だが、在日コリアンの立場から新たな方法、新たなイメージを創造し、間接的に、できるかぎり幅広く、誰もが参加しやすい形態の文化運動を行うためには、伝統的な民族音楽、伝統舞踊、農楽などの伝統文化だけでなく、ジャズ、ロック、美術展示、創作民族衣装のファッションショーなどを取り入れるといった、多彩なプログラムを企画する工夫も必要であった。

さらにワンコリアフェスティバルは、民団からも総連からも敵対視されていた状況のなか、どちらにも偏らないバランスを取った「統合運動」をめざした。1回目のパンフレットに総連系の朝銀大阪信用組合と民団系の大阪興銀、大阪商銀の賛助広告が共に掲載された点は、統合運動を目指したワンコリアフェスティバルの努力の結果であるといえるだろう (図1)。朝銀大阪と大阪興銀の二つの銀行が、それぞれ破綻するまでフェスティバルを賛助していたこ



図1 総連系の朝銀大阪と民団系の大阪興銀の賛助広告

とで、徐々に民団系や総連系の商工人の広告も増えた。これは、理念を越えた統合運動として在日社会に評価された証であったと考えられる。

賛助広告より大きな成果として、1987年7月22日に朝日新聞の国際面に掲載された声明文が挙げられる。対立していた両団体、つまり、総連の在日朝鮮青年連盟大阪本部の当時副委員長と、民団の在日韓国青年連合会の大阪府地方本部の組織部長が、ワンコリアフェスティバルを支持するという声明を発表したのだ。これは両団体からの支持表明であり、統合運動として大きな成果であったと言える。第3回以降は1988年ソウルオリンピックもあり、ワンコリアフェスティバルに参加・協力してくれる人々や団体も増えていった。下記の表1は、この時期のフェスティバルの主な内容を筆者がまとめたものである。

表1 草創期ワンコリアフェスティバルの主な内容  
(1985年～1989年)

年度	主な内容
1985年	8月14日から16日まで、大阪城音楽堂/大阪城公園太陽の広場で開催 正式名称：8・15<40>民族・未来・創造フェスティバル
1986年	「ハナ」コール
1987年	鮮青年連盟大阪本部(当時副委員長と民団)・在日韓国青年連合会(大阪府地方本部の組織部長)による「ワンコリアフェスティバルを支持表明文」発表
1988年	ソウルオリンピック開催

この運動について、日本のメディアも取り扱うようになった。ここでは文字数の関係上、新聞記事の内容は割愛しタイトルのみ紹介するが、「新たな統一運動」、「在日コリアンの和解」などのキーワードが目につく。ワンコリアフェスティバルは、在日社会においても対立から対話、分断から統一を目指し、過去の「理念」を越えた新たな統一運動の模索や提案が可能であることを示した(表2)。

表2 1985年から1989年までの新聞記事タイトル

新聞(日にち)	記事タイトル
神戸新聞 (1985.7.12)	在日韓国・朝鮮人ら8・15フェスティバル、大阪で戦後40周年を機に
読売新聞 (1985.7.13)	在日韓国・朝鮮人の若者がフェスティバル
統一論評 (1985.8月号)	「8・15」40 民族・未来・創造フェスティバル
朝日新聞 (1986.8.8)	祖国統一へ熱い思い込め、民族舞踊や音楽、在日韓国・朝鮮人の若者たち10日に集い
毎日新聞 (1986.8.10)	祖国統一めざしフェスティバル、きょう在日韓国・朝鮮人の若者たち
祖国統一日報 (1986.8.25)	ワン・コリアテーマに、大阪で若者の「8・15フェスティバル」
朝日新聞 (1987.7.22)	政治の壁、越えて一堂に、祖国統一を願う祭典、在日韓国人と朝鮮人の若者
共同新聞 (1988.7.25)	ワン・コリアへ、二、三世の力を結集、8月11日大阪で全国から3000人参加
読売新聞 (1989.7.28)	南北統一願う民族フェス

## 2) 跳躍期(1990年～1999年)：南北の共演実現とアジア共同体へのビジョン拡大

1990年代は東・西の冷戦も終結し、韓国では金大中大統領が就任、北朝鮮に対する太陽政策の実施により、南北間の緊張関係も緩和された。また、韓国での日本の大衆文化の段階的開放を皮切りに、日韓交流が活発に行われた時期であった。このような日韓の政治状況はワンコリアフェスティバルにも反映され、この時期、「南北共演」が実現し定着していった。南北共演は、1990年に韓国の金徳洙サムルノリグループと、当時ユネスコ職員だった北朝鮮の金正規によるアリランの南北合唱が実現したことから始まった。

1990年に初めて南北共演が実現したその、翌年には、在日本朝鮮文学芸術同盟大阪と在日本大韓民国青年会との共演が、1992年には大阪朝鮮吹奏楽団と韓国歌手である金連子との共演が、1993年には韓国オモニ合唱団と総連のオモニ合唱団との共演など、次々に実現されたことにより南北共演が定着していった。跳躍期における主な出来事や内容は、下記表3の通りである。

さらに、跳躍期における特徴として、「統一」以外にも「ワンアジア」、「アジア共同体」、「共生」などの標語が、ワンコリアフェスティバルとともにメディアに登場しはじめた。ワンコリアフェスティバルの



趣旨文においても、草創期には見られなかった「ワンアジア」や「アジア共同体」などのメッセージが増えるという変化があった。また、「共生」という言葉が在日コリアンとともに使われるようになったのも、1999年のワンコリアフェスティバルが在日最大密集地域である大阪の生野コリアタウンで開催されてからだ。これにより、生野コリアタウンは「多文化共生」の拠点として改めて認識されるようになった(表4)。

### 3) 発展・拡散期(2000年～2010年):韓流ブーム、そして海外にいるコリアン社会とのネットワークの構築

1990年代末から南北緊張は緩和され、2000年4月10日、韓国の金大中大統領と北朝鮮の金正日国防委員長による「南北首脳会談」が6月に行われることが決定された。朝鮮半島の「統一」はもはや「理念」ではなく、実現可能な「政策」としての議論がはじまった。

表3 跳躍期ワンコリアフェスティバルの主な内容  
(1990年～1999年)

年度	主な内容
1990年	韓国の金徳洙と北朝鮮の金正規による「南北共演」を実現 「8・15<40>民族・未来・創造フェスティバル」から「ワンコリアフェスティバル」に名称変更 大阪府、大阪市の後援が付く
1991年	在日日本朝鮮文学芸術同盟大阪、 在日本大韓民国青年会の共演
1992年	大阪朝鮮吹奏楽団と韓国歌手(金蓮子)の共演
1993年	汝矣島オモニ合唱団と在阪オモニコーラスの共演
1994年	ワンコリアフェスティバルin東京開催
1997年	多民族合同公演芸術団
1998年	ニューヨーク・ワンコリアフェスティバル開催 生野コリアタウンで開催 大阪朝鮮第四初級学校と金剛学園小学校の パレード
1999年	韓国議政府でワンコリアフェスティバル開催

表4 1990年から1999年までの新聞記事タイトル

新聞(日にち)	記事タイトル
読売新聞(1990.8.4)	祖国統一草の根から、あす ワンコリア・フェスティバル 6回目で南北共演実現
ジャパントイムス(1990.8.8)	Korean festival finds two sides in harmony
日本経済新聞(1990.8.10)	統一、海外同胞の力、南北から参加実現 38度線万博を構想
朝鮮画報12月号	「ハナ、ハナ」の連呼が夜空にこだます、朝鮮総連と民団傘下の同胞芸術家が参加 「ワンコリアフェスティバル」
日本経済新聞(1991.9.15)	統一願い「ワンコリア・フェス」、民団・総連系2団体民族音楽を共演
朝日新聞(1991.9.5)	国連加盟、心の38度線を取ろう 民団、総連の団体が初共演
毎日新聞(1991.9.17)	民団、総連系の団体が初共演
統一日報(1991.9.26)	同胞交流一段と広がり、民団、総連の傘下団体も出演、南北から文化人参加
統一日報(1992.10.20)	伝えよう「ハナの想い」南と北へ、自由往来願い込め 2日間で3千500人参加
毎日新聞(1993.10.13)	「南北統一」は音楽から
朝日新聞(1993.10.15)	ステージから統一アピール、ソウルから合唱団参加
産経新聞(1993.10.17)	38度線を超える 音楽のメッセージ
日刊カンコー (1993.11.6)	第9回「ワンコリアフェスティバルに3000人」、朝鮮民族の南北統一をめざして
週刊SPA1994	大阪秋の風物詩・第10回ワンコリアフェスティバルに感じた熱気
毎日新聞(1995.1.16)	今年は「ワンコリアフェスティバル」から「ワンアジア」へ
朝鮮日報・アメリカ版(1997.5.5)	海外韓民族から一つになろう
朝日新聞(1999.11.5)	在日の象徴的な地域「コリアタウン」 民族、文化超え共生深まる、初めて「まち」が舞台
朝日新聞(1999.11.7)	生野発ハナ、フェスを機に共生期待
朝日新聞(1999.11.8)	「統一」の願い熱く「共生の街から新文化を」
読売新聞(1999.11.8)	在日南北合同パレード、民族学校児童ら練る 生野でワンコリア祭
日本経済新聞(1999.10.30)	生野区でコリア祭 あす、生徒ら南北交流
民団新聞(1999.11.10)	15周年迎えた「ワンコリア」観客動員過去最高1万人
読売新聞(1999.12.21)	在日と共生広がる 大阪生野区 ワンコリア 熱い輪

また、韓国で日本の大衆文化が全面的に解禁され、韓流ブームなどによる日韓関係の拡大、2002年には北朝鮮が日本人拉致を認めるなど、日・韓・朝の三国の関係は大きな変化を見せていた。このような朝鮮半島をめぐる状況の変化のなかで、ワンコリアフェスティバルへの関心は、1990年代後半から日本を越えて、韓国やアメリカにも広がり、2000年代に入ると、中国、ロシア沿海州へまでも波及するようになった（鄭、2015：243）。1999年、38度線に近い京畿道議政府市で開かれた「統一芸術祭」に初めてワンコリアフェスティバルが招待され、以来、2005年まで交流が続けられた。また2003年には、ロシア沿海州「第3回高麗人文化の日フェスティバル」（主催：ロシア沿海州高麗民族文化自治会）にも招待され、2005年の「南北共同宣言5周年記念南北・海外共同大会」では日本側代表委員として参加した<sup>5</sup>。ワンコリアフェスティバルは、日本国内にとどまることなく、全世界に離散する海外コリアンとの共同ネットワークを構築するため、さらなる新たな試みが行なわれていったのである。下記の表5は、この時期のフェスティバルの主な内容をまとめたものである。

2001年には、大阪市観光課から大阪城公園の「太陽の広場」でこのフェスティバルを開催して欲しくないかという依頼を受けた。1998年から生野コリアタウンで行われていたワンコリアフェスティバルの成功や、それまで大阪市の名物祭りとして知られていた四天王寺ワッソを支えていた関西銀行の破綻、その影響で行事が一時中止になるなどの要因が重なり、ワンコリアフェスティバルに開催の依頼がきたという。また、広報も大阪市が全面的に協力するとした<sup>6</sup>。このような経緯で、2002年からはワンコリアフェスティバルが、太陽の広場で開催されるようになった。大阪城公園の太陽の広場は公共施設であり、なかなか使用許可のおりない場所である。にも

かわらず、大阪市が使用を許可したということは大きな意味を持つと同時に、ワンコリアフェスティバルが単なる在日コリアンだけの「祭り」ではなく、名実共に大阪を代表するフェスティバルの一つになった事実を象徴する出来事でもあった。

2004年、ワンコリアフェスティバルに組織的な変化が起きた。統一運動とともに次世代育成や日本人との協力、人権を視野に入れた幅広い実践的な運動を行うため、ワンコリアフェスティバル実行委員会、在日韓国民主人権協議会、民族教育文化センターの三団体が「人権」、「平和」、「共生」という理念を掲げ、「コリアNGOセンター」を発足させたのである。2005年はワンコリアフェスティバル実行委員会とコリアNGOセンターとの共催、2006年はコリアNGOセンター主催によりワンコリアフェスティバルが行われた<sup>7</sup>。とくに、2005年は戦後60周年を記念し、在日コリアンの高齢者と日本人との交流を深めるということで「日韓友情ランチ(宴会)」が企画され、在日コリアン高齢者に参鶏湯が提供された<sup>8</sup>(図2)。

2004年から吹き始めた「韓流ブーム」をワンコリアフェスティバルも積極的に取り入れることになり、2000年代末までフェスティバルの参加者は毎回2、3万人が集まり、2005年には5万人にも達した（鄭、2015：268）。韓流ブームは在日コリアンだけではなく、日本人が参加しやすくなるきっかけにもなり、この時期のワンコリアフェスティバルは、さらなる発展を遂げるようになった（図3）。

2000年代に入ると、規模的にも拡大したワンコリアフェスティバルに関する新聞記事も増え、様々な新聞社が取り上げた。表6は2000年から2010年までの新聞記事の見出しをまとめたものである。

#### 4) 第二の跳躍期 (2011年以後)

2009年、25回目という節目の年、ワンコリアフェ

表5 発展・拡散期ワンコリアフェスティバルの主な内容 (2000年～2010年)

年度	主な内容
2000年	南北首脳会談歓迎ワンコリアフェスティバルin東京開催 ワンコリアフェスティバルin生野開催(11月5日) シンポジウム開催：「21世紀のワンコリアと東アジア：南北共同宣言の意義と海外コリアンの役割」
2001年	ワンコリアフェスティバルin生野開催 「ワンコリアフォーラム」開催：「21世紀ワンコリアとアジア共同体の展望—在日コリアンと日本人の役割」
2002年	大阪城公園の太陽の広場で開催 「ワンコリアフォーラム」開催：「21世紀ワンコリアと東アジア地域構想—朝日国交正常化交渉の行方」
2003年	沿海州「高麗人文化の日」フェスティバルに参加 「ワンコリアフォーラム」開催：「21世紀ワンコリアと東アジア地域構想—盧武○新大統領登場の意味」
2004年	コリアNGOセンター設立 東京ワンコリアフェスティバル開催：代々木公園(2008年まで)
2005年	「南北共同宣言5周年記念南北・海外共同大会」日本側代表として参加
2009年	公益財団法人の設立準備や韓国における「ワンコリアフェスティバル後援会」結成
2010年	「財団法人ワンコリアフェスティバル設立準備シンポジウム」

スティバル実行委員会では、これまでの成果と実績を土台にさらなる飛躍と人材育成のために、日本における公益財団法人の承認を目指すことにした。だが、寄付金控除が受けられる公益財団法人は、一般法人とは違って資格取得が難しく、とくに外国人の団体が取得するのは極めて難しいという（鄭、2015：273、275）。そこでその準備と支援を呼びか



図2 左：在日コリアン高齢者に参鶏湯が提供された様子  
(写真提供：コリア NGO センター)

けるため、2009年8月30日、「ワンコリアフェスティバル韓国後援会」が結成され、ソウルで会合が行われた。後援会には与党・野党の国会議員、学界、文化分野に活躍している人たち、知識人などが参加した。日本でもワンコリアフェスティバルの公益財団法人化を勧める動きが活発化し、多彩な活動が行われた。日韓における活動の成果として2011年7月7日、



図3 2005年ワンコリアフェスティバルの様子  
(写真提供：コリア NGO センター)

表6 2000年から2010年までの新聞記事タイトル

新聞(日にち)	記事タイトル
産経新聞 (2000.8.8)	離散家族再会、南北統一の願い込め、 在日韓国・朝鮮人の子合唱
朝日新聞 (2000.8.9)	南北朝鮮はひとつ
朝日新聞 (2000.11.4)	統一願う歌声響け
日本経済新聞 (2000.11.6)	祖国統一を願ってフェスティバル、 大阪生野コリアタウン
読売新聞 (2001.10.23)	どちらの組織も代弁しない
読売新聞 (2002.11.4)	祖国統一と平和、市民に呼びかけ
朝日新聞 (2002.11.4)	南北統一願うフェス
女性新聞 (2003.1.31)	日本・朝鮮・韓国・在日…ともに生きる存在としてワンコリアフェスティバル in 東京
朝日新聞 (2004.2.21)	共生願い よさこいアリラン 在日韓国人ら来月に発表
朝日新聞 (2004.3.7)	在日3団体が統合 コリアン活動 新風求め
東京新聞 (2004.3.25)	お互い Roots 知りたい、「ワンコリアフェス」 変身 在日学生が呼びかけ
毎日新聞 (2004.3.27)	境界から共生を探る 在日コリアン3団体 総合「センター」設立
東京新聞 (2004.3.29)	ワンコリアへ大学生が祭り 日本人も 企画参加
毎日新聞 (2004.3.29)	ワンコリアフェスティバルに2万人
統一日報 (2004.3.31)	共生願いよさこいアリラン、在日コリアンの 若者たちが発信 日本と共に創る祭り
毎日新聞 (2004.10.23)	多彩な催し共生訴え ワンコリアフェス 冬ソナ出演者に歓声

新聞(日にち)	記事タイトル
朝日新聞 (2004.10.25)	アジア共生「ワンコリアフェス」
読売新聞 (2004.10.25)	ハナ！合言葉に 日韓中露のコリアン 連携確認
大阪日日新聞 (2004.10.25)	南北統一と平和願い 大阪城公園 伝統芸能など披露
朝日新聞 (2005.10.25)	ワンコリア祭典、30日大阪城公園で本場の 韓流大集合
毎日新聞 (2005.10.25)	僕らは一つのハナ、韓流スターも出演 「ワンコリアフェス」
読売新聞 (2005.10.29)	「コリア」未来と伝統を見つめる、 「南北一つに」韓流スターPR
毎日新聞 (2005.10.31)	南北統一願う5万人が参加
朝日新聞 (2006.4.3)	在日コリアン 若さふれあい 代々木
毎日新聞 (2007.10.27)	和解の流れ実感できるイベントに
毎日新聞 (2008.10.19)	「HANAX東アジアの未来」韓国俳優の トークショーやライブ
朝日新聞 (2008.10.23)	26日、ワンコリアフェス 祖国統一願う 24回目 あす慈善コンサート
読売新聞 (2008.10.25)	あすワンコリアフェス 大阪城公園 パクさんらのトークも
女のしんぶん (2009.7.10)	共生への想い音楽や踊りに込めて
朝日新聞 (2009.10.23)	朝鮮半島ひとつに「ワンコリアフェス」 25周年を日韓で盛り上げ
読売新聞 (2009.10.26)	継承へ財団設立募金 大阪城公園で ワンコリアフェス
朝日新聞 (2010.10.22)	大阪城公園統一願う26回目

ワンコリアフェスティバルは公式に「公益財団法人」として認定されることとなった。これをうけ、「東アジア共同体の未来に向けて一市民・地域交流を中心に」というテーマで、設立記念シンポジウムが開かれた。表7は、2011年から2016年までの主な内容である。

表7 第二の跳躍期ワンコリアフェスティバルの主な内容  
(2011年～2016年)

年度	主な内容
2011年	ワンコリアフェスティバルが公益財団法人に認可「財団法人ワンコリアフェスティバル設立記念シンポジウム」開催
2012年	「ハナ～奇跡の46日間」
2013年	「ワンコリア・オンヌリ・フェスティバル」inソウル開催
2014年	ワンコリア・オンヌリ・フェスティバルDMZ(非武装地帯)での開催
2016年	第32回開催

2013年には、日本のワンコリアフェスティバル実行委員会とは別に、韓国ワンコリアフェスティバル実行委員会の主催により、ソウルで「ワンコリア・オンヌリ・フェスティバル」が開催された。「オンヌリ」は韓国語で世界という意味であり、日本で行われるワンコリアフェスティバルとは違い、世界各地のコリアンとの交流を目的としている。2014年には、韓国の軍事境界線に近い臨津閣平和公園で初開催され、在日コリアンをはじめとする海外コリアンや韓国国民が共に参加する行事になった(表8)。

ワンコリアフェスティバルは朝鮮半島の統一を願うだけでなく、在日コリアンと日本人、日本とアジアとの共生や平和を願う文化イベントとして、32年

表8 2011年から2016年までの新聞記事タイトル

新聞(日にち)	記事タイトル
毎日新聞 (2011.10.21)	東アジアの連帯願う23日に ワンコリアフェス
毎日新聞 (2013.9.25)	在日文化で訴える平和
読売新聞 (2013.9.28)	朝鮮文化を体感 ワンコリアフェス
毎日新聞 (2014.10.24)	統一と平和願う30回目
日本経済新聞 (2014.11.3)	平和願う2000人集う、歌や伝統舞踊楽しむ
大阪日日新聞 (2015.11.2)	平和と統一願う30周年、大阪でワンコリアフェス 音楽に思い込め
毎日新聞 (2016.10.30)	朝鮮半島ひとつに、来月6日・中央区で 「フェスティバル」
朝日新聞 (2016.11.5)	「ハナ」合言葉にワンコリアフェス

間も存在し続けてきた。第二跳躍期に入ったワンコリアフェスティバルがこれからどのように変化していくかをこれからも見守っていきたい。

### III ワンコリアフェスティバルの役割と効果

#### 1. ワンコリアフェスティバルアンケート分析

III章では、発展・拡散期にあたる2010年に筆者が行なったアンケート調査の結果を踏まえながら、ワンコリアフェスティバルの役割と効果を見ていこう。

筆者が2010年にアンケートを行った目的は、次の三つの疑問点にあった。第一に、ワンコリアフェスティバルは在日コリアン世代間の融合の場として役割を果たしているのか。第二に、韓国文化の発信の場として、在日コリアンと日本人との交流に役立っているのか。第三に、アジア共同体を目指すワンコリアフェスティバルが多文化共生の場として寄与しているのか。以上の目的のもとアンケート調査を実施し、その結果からワンコリアフェスティバルが在日コリアンや日本社会にどのような影響を与えているのか、明らかにしようと試みた。では、アンケートの結果について述べていく。

アンケート<sup>10</sup>の項目は、人口社会学的特性に関する項目を除き全部で14項目設けた。最初に、人口社会学的特性に関する項目①性別、②年齢、③国籍、④参加回数、⑤職業、⑥学歴、⑦同伴類型、⑧居住地一の結果を見てみよう。

アンケートに答えた訪問客の性別の割合は、男性が約13%、女性が87%となった。女性の割合が遥かに高かった理由としては、韓流ブームの影響が大きいと考えられる。年齢は50代が40%、60代以上が24%、40代が19%、30代以下が17%であった。

国籍は日本人及びその他が85%、在日コリアン15%で、日本人の参加率が高かった(図4)。

参加回数については、1回が36%、2回が16%、3回が13%、4回が13%、5回以上が22%となった。参加者のなかでは、1回目から2010年度の26回目まで欠かさず参加しているという人もいた(図5)。

同伴類型は友達52%、家族28%、一人17%となり、友達や家族と一緒にくる場合が多かった。友達同伴の場合はともに韓国に興味を持っている仲間が多く、家族同伴の場合は母と娘が多く、母親は韓流ドラマ、娘はK-POPのファンが多いことがインタ



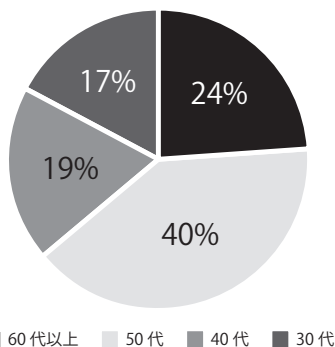


図4 年齢別の割合

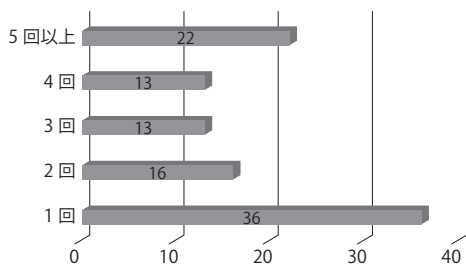


図5 参加回数

ビューから分かった（それ以外の項目の結果については表9参照）。

1) 在日コリアンの世代間融合の場

ワンコリアフェスティバルは在日コリアンの世代間融合の場としての役割を果たしているのか。「在日コリアンの世帯間融合に寄与している」という項目に対して、そうだ：64.2%、普通だ：12.1%、そうではない：23.7%だった。そうだと答えた人の内、在日コリアンが65.5%という高い割合をみせた。一方、そうではないと答えたのは全体の23.7%で、この結果からワンコリアフェスティバルは、在日コリアンの世代間融合の場としての役割を果たしていると考えられる(表10)。

草創期には総連や民団からも敵視されていたワンコリアフェスティバルだが、若い世代の参加を呼びかけるために企画やプログラムに工夫するなどした。結果、2004年からは若者を中心に東京ワンコリアフェスティバルが始まるまでになった。また、2005年には在日高齢者が参加できるようなイベントも設けるなど、ワンコリアフェスティバルは在日コリアンの世代間融合のため努力してきた。その結果が、2010年に実施したアンケートに反映されたと考え

表9 人口社会的特性に関する項目の結果

	区分	頻度	割合	累積割合
性別	男	24	12.6	12.6
	女	166	87.4	100.0
年齢	30代以下	32	16.8	16.8
	40代	36	18.9	35.8
	50代	77	40.5	76.3
	60代 以上	45	23.7	100.0
国籍	在日コリアン	29	15.3	15.3
	日本及びその他	161	84.7	100.0
参加回数	1回	69	36.3	36.3
	2回	31	16.3	52.6
	3回	24	12.6	65.3
	4回	25	13.2	78.4
	5回 以上	41	21.6	100.0
職業	生産職・労務職	5	2.6	2.6
	販売職	3	1.6	4.2
	サービス職	13	6.8	11.1
	事務職	27	14.2	25.3
	研究・専門職	14	7.4	32.6
	行政・管理職	1	0.5	33.2
	専業主婦	73	38.4	71.6
	学生	9	4.7	76.3
	その他	45	23.7	100.0
	学歴	中卒以下	11	5.8
高卒		103	54.2	60.0
大学在学		8	4.2	64.2
大卒		59	31.1	95.3
大学院卒以上		9	4.7	100.0
同伴類型	1人	33	17.4	17.4
	友達	98	51.6	68.9
	恋人同士	1	0.5	69.5
	家族	53	27.9	97.4
	その他	5	2.6	100.0
居住地	大阪府	144	75.8	75.8
	京都府	5	2.6	78.4
	奈良県	14	7.4	85.8
	兵庫県	17	8.9	94.7
	広島県	1	0.5	95.2
	香川県	2	1.1	96.3
	愛知県	1	0.5	96.8
	無応答	6	3.2	100.0
合計		190		100.0

表10 在日コリアンの世代間融合の場という項目の結果

項目	回答	在日コリアン	日本人・その他	全体	χ2
在日コリアンの世代間融合に寄与している	そうだ	19(65.5%)	103(64.0%)	122(64.2%)	6.674*
	普通だ	7(24.1)	16(9.9%)	23(12.1%)	
	そうではない	3(10.3%)	42(26.1%)	45(23.7%)	

えられる。

## 2) 韓国文化発信の場及び在日コリアンと日本人との交流の場

次に、韓国文化の発信の場として在日コリアンや日本人との交流に役立っているのかという点に関して、ワンコリアフェスティバルは、①在日コリアンと日本人との交流の場になっている、②在日コリアンを理解するのに役に立つ、③韓国に関する知識や理解を増進させる、という三つの項目を設定した。

各項目の回答率をみると、「①在日コリアンと日本人との交流の場になっている」に対して、そうだ：86.3%、普通だ：6.8%、そうでない：6.8%であった。次に「②在日コリアンを理解するのに役に立つ」という項目に対しては、そうだ：85.3%、普通だ：6.8%、そうではない：7.9%であった。そして、「③韓国に関する知識や理解を増進させる」という項目においては、そうだ：91.1%、普通だ：3.7%、そうではない：5.3%となった。

ワンコリアフェスティバルに参加する理由も、「気楽に日韓交流ができて楽しい」、「多様な韓国料理が楽しめる、日本とは違う韓国文化を接することができるから良い」、「今まで知らなかった韓国文化や食

文化を接することができ、また韓国の最新情報を得ることができる」、「在日コリアンと交流する機会があまりないので、様々な韓国関連のイベントに参加する、韓国文化に興味があるから」など、多様であった。実際、会場には、ワンコリアフェスティバル実行委員会が朝鮮通信使展、ハングル体験、フリーマーケットなどを設け、多彩な体験ができるようになっていた。これらのことから、ワンコリアフェスティバルに参加する最も大きな理由が、気軽に韓国文化に触れられるためであることが明らかになった（表11）。

2010年の日本人の参加者は84.7%であった。この点からワンコリアフェスティバルは、統一運動はもちろんのこと、韓国文化を発信する架け橋の役割も果たしていることが分かる。

## 3) 多文化共生の場

アジア共同体を目指すワンコリアフェスティバルが多文化共生の場として寄与しているのかを調査するために、「色んな文化や人に触れ合うことができる」という項目を設けた。これに対する回答は、そうだ：78.9%、普通だ：11.1%、そうではない：10.0%という結果であった（表12）。

表11 「韓国文化の発信及び在日コリアンと日本人の文化交流の場」という項目の結果

項目	回答	在日コリアン	日本人・その他	全体	χ2
在日コリアンと日本人との交流の場になっている	そうだ	24(82.8%)	140(87.0%)	164(86.3%)	0.664
	普通だ	3(10.3%)	10(6.2%)	13(6.8%)	
	そうではない	2(6.9%)	11(6.8%)	13(6.8%)	
在日コリアンを理解するのに役に立つ	そうだ	21(72.4%)	141(87.6%)	162(85.3%)	10.297*
	普通だ	6(20.7%)	7(4.3%)	13(6.8%)	
	そうではない	2(6.9%)	13(8.1%)	15(7.9%)	
韓国に関する知識や理解を増進させる	そうだ	25(86.2%)	148(91.9%)	173(91.1%)	4.424
	普通だ	3(10.3%)	4(2.5%)	7(3.7%)	
	そうではない	1(3.4%)	9(5.6%)	10(5.3%)	

表12 色んな文化や人に触れ合うことができるという項目の結果

項目	回答	在日コリアン	日本人・その他	全体	χ2
色んな文化や人に触れ合うことができる	そうだ	22(75.9%)	128(79.5%)	150(78.9%)	1.557
	普通だ	5(17.2%)	16(9.9%)	21(11.1%)	
	そうではない	2(6.9%)	17(10.6%)	19(10.0%)	

ワンコリアフェスティバルは、多文化共生という趣旨で、プログラムに韓国伝統音楽、舞踊だけではなく、様々なアジアの伝統文化を取り入れ、紹介してきた。日本社会においてマイノリティとして最も長い歴史を持つ在日コリアンは、このような祭りを通じて祖国の文化だけではなく、他のアジア諸国のマイノリティ文化も日本社会に紹介しながら、多文化共生社会構築の役割を果たしている。また、単一民族意識の強い日本社会に対して、アジアの市民としての意識の高揚、東アジア共同体などのメッセージも持続的に発信しているのである(図6)。



図6 様々なアジア伝統文化発表の様子

左上：韓国の伝統遊び 右上：中国の伝統音楽 下：タイの舞踊 (写真提供：コリア NGO センター)

## 2. ワンコリアフェスティバルの効果

次に、ワンコリアフェスティバルの効果を影響力・波及性という二つの側面からみてみよう。

影響力の側面からいえることは、まず、在日コリアン社会内部への影響として、これまで内在していた在日コリアン間の葛藤を解消しようとしたことと、統一問題に対する意識が希薄になっていた若い世代の関心を高め参加を促したことにより、「統合運動」としての役割を果たしたといえる。そして、在日コリアンの世代間融合の場を築くことにもなった。また、外部との関わりにおける影響としては、日本社会に生じた韓流ブームを追い風に在日コリアンと日本人との交流の場を提供し、韓国文化の発信の場として定着したことや、在日コリアンに限らず日本で生活するマイノリティの文化をフェスティバルのプログラムに取り入れ、在日コリアン・日本

人・その他の外国人がともに生きる社会づくりや、アジア市民としての意識を高揚させたことなどが挙げられる。

また、波及性については、日本で始まったこの運動が韓国、中国、ロシア、アメリカまで広がったことに見ることができる。祖国の「分断」という「理念」は存在していても、朝鮮半島のように物理的な38度線は引かれていない日本という「場」が存在し、日本の近・現代史の一部である在日コリアンが存在し、彼らによってこの「祭り」が始められたということ、そして日本という空間で「在日コリアン」によって始まった統一運動が、海外コリアン社会にも広がり、ネットワークの構築へと繋がっていること。これは、ワンコリアフェスティバルのもたらした波及性であるといえるだろう。

## IV まとめ

ここまで本稿は、ワンコリアフェスティバルがどのような役割を果たしてきたのか。また、在日コリアン社会や日本社会にどのような影響を及ぼしたのか、そして、在外コリアン社会にどのような影響を与えたのかについて考察してきた。

第一に、ワンコリアフェスティバルの役割として、それが在日コリアンの世代間融合の場、韓国文化の発信の場であり、在日コリアンと日本人との交流の場など多様な役割を果たしていて、アジア共同体を目指すワンコリアフェスティバルが多文化共生の場として寄与していることが、アンケート結果により明らかになった。

第二に、ワンコリアフェスティバルが在日コリアン社会や日本社会にどのような影響を及ぼしているのかについて、まず、在日コリアン社会においては、在日コリアン間の葛藤解消、若い世代に対する統一への関心及び参加の促進により、「統合運動」として位置づけられ、在日コリアン世代間の融合の場ともなっていたこと。また、日本社会においては、韓流ブームを追い風に在日コリアンと交流できる機会を提供し、韓国文化の発信の場として定着したこと。そして、韓国以外の在日アジア人のマイノリティ文化もプログラムに取り入れることによって、在日外国人と日本人がともに生きる社会づくりや、アジア市民意識の高揚など、あらゆる面で影響力を与えていることを導き出した。

第三に、海外コリアン社会にどのような影響を与えたかについて、統一運動の違う形として日本で在

日コリアンによって始まったワンコリアフェスティバルが、1998年にニューヨーク、1999年には韓国、2003年にはロシア沿海州に招待され、単発ではあるが2014年の韓国非武装地帯で開催するなど海外コリアン社会にも広がり、そのネットワーク構築に繋がっていることが分かった。

ワンコリアフェスティバルは、朝鮮半島の統一や在日コリアン社会と日本社会との和合、さらには東アジアの和解と協力を目標としている。さらに、朝鮮半島の統一という極めて政治的な 이슈を非政治運動と文化運動に結合した、まったく新しい運動であった。このような基本理念は、ワンコリアフェスティバルのプログラムから確認できる。南北の諸団体の反目や南北政府の警戒により、大変な道のりを歩んできたワンコリアフェスティバルだが、現在もまた南北関係の悪化や、大阪の保守政権登場により開催場所として利用してきた大阪城公園の有料化、地下鉄などでのポスター禁止など、様々な厳しい状況に置かれている。

2000年代に入ってから、南北統一は、単なる理念ではなく具体的な政策として議論・認識されるようになった。しかし、ワンコリアフェスティバルは南北統一というメッセージを発信するための手段に過ぎず、「祖国統一・ワンコリア」を訴えてはいるものの、具体的な政治的プログラムに基づいているわけではない。飯田(2002)が指摘したように、今のところ政治的な次元で、ワンコリアフェスティバルが南北に分断された在日コリアンの統一という機能を持つとはいえない。これまでワンコリアフェスティバルを通じて積み重ねてきた成果をどのように活かし、現在の危機をどのように克服していくかなど、課題は散在している。知恵を絞り、課題を改善しながら第二の跳躍期が発展することを期待したい。

## 付記

本研究の調査や執筆にあたっては、「2016年度科学研究費助成金(基盤研究C)、『大阪生野コリアタウンにおける新たな重層的・複合的空間への変容実態に関する研究』、研究課題番号16K03199、研究代表者:孫ミギョン」を使用した。

## 注

- 1) 本稿は、韓国の在外韓人研究に掲載された「大阪ワンコリアフェスティバルー統一運動から多文化共生まで」(2010)原稿に加筆修正補完を施したものである。
- 2) 在日コリアン、在日朝鮮人、在日韓国人、在日朝鮮・韓国人、在日コリアンなど、彼らを称する用語は様々である。本稿では、引用文除き、1948年朝鮮半島に正式な政府が樹立するまでは「在日朝鮮人」という用語を用いるが、その後の時期は、「在日コリアン」に統一する。
- 3) 筆者がワンコリアフェスティバルの調査を進めた2010年までは先行研究がほとんどなかったため、鄭甲寿実行委員長インタビューや、第26回(2010年)のワンコリアフェスティバル参加者を対象にアンケート調査を実施した。
- 4) ワンコリアフェスティバルの時期分けは孫(2010)、金(2013年)を参考にした。
- 5) 2016年12月27日、鄭申寿ワンコリアフェスティバル実行委員長のインタビュー内容。
- 6) 2016年12月27日、鄭申寿ワンコリアフェスティバル実行委員長とのインタビュー内容。
- 7) 2013年より、コリアNGOセンターとワンコリアフェスティバル実行委員会は別の組織として運営されている。
- 8) 2017年1月12日、郭辰雄コリアNGOセンター代表理事のインタビュー内容。
- 9) 2011年一般財団法人として登録、4月に公益財団法人の認定の申請、6月に公益財団法人として認定された。理事が全員韓国国籍の団体が認定されたのは国内初の事例である。
- 10) アンケートの全14項目、ワンコリアフェスティバルに対する満足度(5項目)、プログラムの属性(5項目)、プログラムに対する満足度(3項目)、開放型の質問(1項目)である。198枚の回答を得た。その内、190枚を3点尺度により交差分析を行った。

## 参考文献

- 山崎孝史、2013、『政治・空間・場所』、ナカニシヤ出版。
- 孫ミギョン、2015、「大阪生野コリアタウンとソウルガリボン洞—二つのエスニックコミュニティの過去といま—」、『市政研究』第186号。
- 鄭申寿、2015、『ハナ—ワンコリア道草回顧録』、こるから。
- 飯田剛史、2002、『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学』、世界思想社。
- 飯田剛史、2006、「在日コリアンと大阪文化・民族祭りの展開—」、『フォーラム現代社会学』5輯。
- Chung, Yong-Ha, 「The Joint・Network on the Unification Movement of Korean residents in Japan」、『The Journal of Korean-Japanese National Studies』vol.13、2007。(정용하, 「재일한인 통일운동에 나타난 연대・네트워크-통일운동의 시기별 특징과 연대・네트워크」、『한일민족문제연구』제13호、



- 2007)
- Ji Choong Nam a, 「A Study on the Third National Unification Movement of Korean Residents Community in Japan」, 『The Korean Association of Northeast Asia Studies』 vol.69, 2013.(지충남a, 「재일동포사회의 ‘제3의 민족통일운동’ 고찰」, 『한국동북아논총』제69호, 2013)
- Ji Choong Nam, 「Koreans in Japan and the One Korea Festival: Mechanism of National Unification and Coexistence」, 『The Journal of Social Paradigm Studies』, 2013.(지충남b, 「재일동포와 원코리아페스티벌: 통일과 공생의 기제」, 『The Journal of Social Paradigm Studies』, 2013)
- Ji Choong Nam, 「The unification movement in society of Korean residents in Japan: Focusing on Mindan, Jochongryon and One Korea Festival」, 『Minjok Yeonku』 vol.64, 2015.(지충남, 「재일동포 사회의 통일운동: 민단, 조총련, 원코리아페스티벌을 중심으로」, 『민족연구』 64호, 2015)
- Kim, Hee-Jung, 「A Study on Integrating cultural movement of Japanese-Koreans into festival: Focusing on One-Korea Festival」, Department of Business Entrepreneurship, Graduate School of Cultural Business Entrepreneurship Yewon Arts University, 2013.(김희정, 「축제를 통한 재일코리안의 종합적 문화운동에 관한 연구: 원코리아페스티벌을 중심으로」, 예원예술대학교 문화영상창업대학원 석사논문, 2013)
- Kim, Tae-Young · Yim, Young-Eon, 「A Study on the Unification Madang of Hantongnryeon and Unification Cultural Movement of One Korea Festival in the Zainichi Korean Society」, 『Journal of Japanese Culture』 vol.69, 2016(김태영 · 임영언, 「재일코리안 사회의 한통련 통일마당과 원코리아페스티벌 통일문화운동 고찰」, 『일본문화학보』제69집, 2016)
- Ko Jeong-ja · Son Mi-Gyeong, 「Osaka Zainichi Community and Festival: on Ikuno Ethnic Festival」, 『The Korean Community』 vol.21, 2014. (고정자 · 손미경, 「재일코리안 사회와 축제-이쿠노 민족문화제를 중심으로-」, 『한민족공동체』 제21호, 2014)
- Lee, Sin-Cheol, 「History of the Unification Movement within the Korean Resident Society in Japan and its new approach-Focused on One-Korea Festival-」, 『sarim』 vol.52, 2015.(이신철, 「재일동포사회의 통일운동 흐름과 새로운 모색-원코리아페스티벌을 중심으로-」, 『사림』제52호, 2015)
- Son Mi-Gyeong, 「One Korea Festival, Osaka: From an Unification Movement to Coexistence」, 『Studies of Koreans Abroad』 vol.23, 2011.(손미경, 「오사카 원 코리아 페스티벌: 통일운동에서 다문화 공생의 장으로」, 『재외한인연구』 제23호, 2011)
- Son Mi-Gyeong, 「The Importance of the Initial Collection of Materials and Later Research Direction on the Study of Japanese Koreans」, 『The Journal of Global Cultural Contents』 vol. 2 4, 2 0 1 6(손미경, 「재일코리안 연구에 있어서 1차 역사자료 수집의 의의와 향후 방향성-재일코리안 가정에 잠자는 역사 자료 발굴 사업을 중심으로-」, 『글로벌문화콘텐츠』 제24호, 2016)
- Youn, Hwang · Cho, Heewon, 「The Present Situation and Tasks of Associations of Overseas Korean for Unification Movement in America, Japan, and China」, 『Journal of Diaspora Studies』 vol.8(2), 2014.(윤황 · 조희원, 「재외한인동포사회의 통일운동단체 현황과 과제: 중국 미국 일본의 재외한인단체를 중심으로」, 『디아스포라연구』 제8권 제2호, 2014)
- 黄慧瓊, 「在日コリアンにおける民族祭の意味とホスト社会との関係に関して:大阪と川崎を中心に」, 『日本文化學報』, 第46輯, 2010(황혜경, 「재일코리안에 있어서 민족축제 의미와 호스트사회와의 관계: 오사카시와 가와사키시를 중심으로」, 『일본문화학보』 제46집, 2010)

## 付録：アンケート質問紙

## ワンコリアフェスティバルに関するアンケート調査

本アンケートはワンコリアフェスティバルに関する研究を行うために実施しております。皆さんの意見を是非ご参考にさせていただきますと思います。ご多用のところ恐縮ですが、ぜひご協力をお願いいたします。

I. 始めにのアンケートに回答される方についてお尋ねします。あてはまる番号に○をつけてください。				
性別	①男	②女	年齢	才
国籍	①在日(1世、2世、3世、4世)		②日本	③その他(具体的に)
参加回数	今年を含めて( )回目の参加			
職業	①生産業及び労務者	②販売職	③サービス職	④事務職
	⑤研究・専門職	⑥行政管理職	⑦専業主婦	⑧農業・畜産業・林業・水産業
	⑨学生	⑩その他( )		
学歴	①中卒以下	②高卒	③大学在学中	④大卒(短期大学含み)
	⑤大学院卒以上			
情報源 (複数選択可能)	①インターネット	②新聞・雑誌	③テレビ	④ラジオ
	⑤チラシ	⑥周りの人からの口コミ		
	⑦その他(具体的に)			
同伴者	①1人	②友達と一緒に	③恋人と一緒に	④家族と一緒に
	⑤その他(具体的に)			
居住地	( )県 ( )市 または ( )町			

II. ワンコリアフェスティバルの概念及び有用性、波及効果に関する質問です。					
ワンコリアフェスティバルは	全然 そうでない	そうでは ない	普通だ	そうだ	とても そうだ
1. 在日コリアンだけのフェスティバルである	①	②	③	④	⑤
2. 在日コリアンの世代間の融合に寄与している	①	②	③	④	⑤
3. 在日コリアンと日本人との交流の場になっている	①	②	③	④	⑤
4. 在日コリアンを理解するのに役に立つ	①	②	③	④	⑤
5. 韓国に関する知識や理解を増進させる	①	②	③	④	⑤

III. ワンコリアフェスティバルのプログラムの属性にかんする質問です					
ワンコリアフェスティバルのプログラムは	全然 そうでない	そうでは ない	普通だ	そうだ	とても そうだ
1. プログラムはバラエティーである	①	②	③	④	⑤
2. 他のイベントと差別化されている	①	②	③	④	⑤
3. 興味深いし面白い	①	②	③	④	⑤
4. 韓国の文化や独特な特性(アイデンティティ)を反映している	①	②	③	④	⑤
5. 色んな文化や人に触れ合うことができる	①	②	③	④	⑤

IV. ワンコリアフェスティバルに関する全般的な満足度及び行動意図についての質問です。					
ワンコリアフェスティバルは	全然 そうでない	そうでは ない	普通だ	そうだ	とても そうだ
1. 第26回 ワンコリアフェスティバル2010に全般的に満足する	①	②	③	④	⑤
2. 来年も是非ワンコリアフェスティバルに参加したい	①	②	③	④	⑤
3. 他の人にもワンコリアフェスティバルをお勧めしようと思っっている	①	②	③	④	⑤

V. ワンコリアフェスティバルに参加した感想を自由に聞かせてください。

以上です。ご協力ありがとうございました。